

## 第9章

# 個人別態度構造分析の一つ としてのHITY法

いとうたけひこ・井上孝代

筆者らのPAC分析による研究のきっかけは、留学生を対象とする研究であった。質問紙による量的なデータだけではかならずしも十分に個人的な背景などを含めた理解が得られないことを実感してきた。そこで文化的背景の異なるさまざまな立場の留学生の心理的内界をより深く探求する方法としてPAC（個人別態度構造）分析（内藤，1993, 1997, 2002）を試み、その臨床心理学的適用の実践研究と方法論的検討をおこなってきた（井上，1997, 1998, 2004, 2007; 井上・伊藤，1997, 2008）。前章ではこの量的かつ質的アプローチである個人別態度構造分析としてのPAC分析がさまざまな分野で活用されていることを紹介した（第8章，井上・伊藤，2008）。

### 9-1 個人別態度構造分析の一つとしてのHITY法

われわれは、芳澤（2008）の父親の育児観と母親の育児観の夫婦比較の研究を進めるにあたり、PAC分析を拡張した新しい態度構造分析の方法を開発した（伊藤・芳澤・井上，2008）。これを第1著者、第2著者、第3著者の姓名のイニシャルを組み合わせてHITY（ハイティーと発音）法と名付けた。英語では、その発音と対話法であるという特徴を生かす意味からHigh Tea Method（午後の紅茶法）と命名した。

HITY法は（1）あるテーマについて要素（Element）と構成概念（Construct）を作成し、（2）各構成概念に対する要素の重要度を評定し、（3）評定されたデータから距離行列を作成し、その距離行列をクラスター分析と多次元尺度法



いる場合は、この簡便法を用いる。実施が短時間で済むのがこの方法の利点である。

伊藤・芳澤・井上 (2008) では、表 9-1 のように育児イメージのレポートリーグリッドを研究者が準備し、研究協力者に評定してもらった。

対話法は要素項目と構成概念を対話により生成していく方法である。Tindall (2008) が紹介しているパーソナル・コンストラクト技法としてのレポートリーグリッドを用いた方法は、その一つの例である。この例では、職場の上司というテーマについて、上司の個人名を研究協力者と研究者が対話して列挙し、その中から 3 人を選び、類似点を持つ 2 人と相違点を持つ 1 人につき、その類似点と相違点を参加者が命名する (=コンストラクトを生成する) ことができるように、研究者が援助する。

表 9-2 の教頭のレポートリーグリッド (類似点と相違点の生成後) は、研究協力の同意を得たある教頭を被験者にして、職場でのコンフリクトについて対話法で生成したレポートリーグリッドである (井上・伊藤, 2009)。まず、最初に職場のコンフリクトを刺激語にして表 9-3 のように 10 項目の回答を得た。これら 10 項目のカードから無作為に 3 枚を選び内容が似ているもの 2 枚と違い

表 9-2 教頭のレポートリーグリッド (類似点と相違点の生成後)

類似点	コンフリクトの 10 項目										相違点
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	
教員とのトラブル		×	×					○			教員自身の問題
アドバイスが受け入れられない	×				×		○				具体的注意
学校全体の課題						○			×	×	他人の関係
常日頃の教員に対する不満				○	×			×			特定のこと
怒りの感情	×	○							×		怒りはない
私の不快感			×			○	×				心がけ
新しいものへの意欲				×				○		×	使命感不足
自分の内面の説得力				×			○			×	怒り
重い課題			○						×	×	個別性
トラブル原因にある責任感	○	×	×								原因は人間関係

×は類似点の 2 項目、○は相違点の 1 項目を表す

表 9-3 語連想により教頭から得られたコンフリクトの項目 (井上・伊藤, 2009)

- 
- ①授業参観後の教員と私の反省会において、問題点を指摘しても素直に受け入れられないことがある。
  - ②朝会の開始時に着席していない教員に対し名指しで着席するよう注意したら、あとで「人前で辱めることをしないでくれ」と興奮して反発された。
  - ③文化祭の準備において、あるクラスの展示装飾が安全性に問題があるので生徒にしっかり補強するように注意したところ、あとで担任から「生徒は傷ついている。生徒に言う前になぜ担任に言わないのか」と強い抗議を受けた。
  - ④修学旅行の前日の打ち合わせで旅行中の新たな業務のお願いをしたところ、「担当者の苦勞もしらずに勝手なことを言うな」と担任団から反発を受けた。
  - ⑤教員が起案する文書を細かく修正すると不快に思う教員が中において、直し方にも気を遣うことがある。
  - ⑥二人教頭なのでお互いの意見の食い違いにより教員を惑わすことがないように、常に相手の教頭の考えを理解することに意を尽くしている。
  - ⑦生徒がケガをしたときに、すぐに教頭に連絡がこなかったときに、当該教員に対して幾度か注意をした。
  - ⑧忙しいという理由で課外補習をやりがらない教員がいて困っている。
  - ⑨先生方が行事や会議を理由に割と気軽に授業をカットする雰囲気は本校にはある点が問題である。
  - ⑩職員間に「現状維持でよし」の雰囲気強く、更なる取り組みに対する抵抗感を常に感じている
- 

の大きいもの1枚に分けた。表9-2では、各行に×がついている項目は類似点の2項目、○がついている項目は相違点の1項目を表す。この作業を何度かおこなった後、もう十分と判断した段階で表9-2のような結果を得た。

対話法の長所は、研究協力者から行列の項目が出発することである。したがって、個人別態度構造分析の手法としては最もリアリティを重視した方法であるといえる。この方法の短所は、レポーターグリッドの完成のための実施時間が長くなるということである。

中間法は、第一には、要素項目(列)は研究者が予め提示して、構成概念(行)は研究協力者に生成してもらうという方法である。第二には、その逆に、構成概念(行)すなわち評定基準を研究者が予め提示して、要素項目(列)を研究協力者が生成するという方法もある。

いずれも、行列のどちらかを固定しておき、もう一方を研究協力者に生成し

ってもらう方法である。簡便法と対話法の折衷的方法である。

### 9-2-2 ステップ (2)：各構成概念における要素の重要度の評価

記録用紙を用いて各構成概念における要素の重要度を研究協力者本人が評価する。評価方法は、順位でもよいし、2段階評価でも、5段階評価や10段階評価などでもよく段階は自由である。また、同値 (tie) を少なくするために、1点から100点をつけさせてもよい。

対話法によってステップ (1) を終えた表9-2の行列の各セルは評価点が空欄である。これらのセルを各行の構成概念 (コンストラクト) に基づき、類似点に100%合致すれば100点、言い換えると相違点が100%合致すれば0点として協力者の教頭に各要素10項目を評価してもらった。その結果を表したものが表9-4 教頭のレポートリーグリッド (類似点と相違点に基づいて評価された) である。レポートリーグリッドの完成であり、これでステップ (2) の完了とな

表9-4 教頭のレポートリーグリッド (類似点と相違点に基づいて評価された後) (井上・伊藤, 2009)

類似点	コンフリクトの10項目										相違点
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	
教員とのトラブル	70	×100	×100	80	80	50	10	○0	0	0	教員自身の問題
アドバイスが受け入れられない	×100	50	0	90	×90	20	○0	100	100	100	具体的注意
学校全体の課題	0	0	0	0	50	○0	30	80	×100	×100	他人の関係
平日頃の教員に対する不満	30	50	0	○0	×100	80	50	×100	100	100	特定のこと
怒りの感情	×20	○100	20	50	20	0	100	80	×80	80	怒りはない
私の不快感	100	100	×100	80	40	○0	×100	80	80	80	心がけ
新しいものへの意欲	20	0	0	×80	0	0	0	○100	0	×100	使命感不足
自分の内面の説得力	50	100	100	×80	0	0	○0	50	50	×50	怒り
重い課題	100	0	○0	0	50	50	0	×100	×100	100	個別性
トラブル原因にある責任感	○10	×100	×100	80	20	0	0	0	0	0	原因は関係

×は類似点の2項目、○は相違点の1項目を表す

る。

簡便法・中間法でも同様にステップ(1)で生成された行列表を、研究協力者に評定してもらう手続きを取る。

### 9-2-3 ステップ(3)：データ行列から樹形図と布置図を作成

ステップ(3)は、評定されたデータから距離行列を作成し、距離行列をクラスター分析と多次元尺度法(多次元尺度構成法：MDS)により計算し、結果を樹形図と布置図として表現する。PAC分析でもHITY法でも、距離行列を作成してそれをクラスター分析にかける点では手続きが共通している。PAC分析における距離行列の作成では評定された(非)類似度から直接的に3角形の形の対称行列を作成するのに対して、HITY法においては、表9-2のようにコンストラクト(評価基準)を行とし、エレメントを列とした行列(=グリッド)から距離行列を生成する(SPSSではPROXIMITYコマンドを利用している)。

① クラスター分析の樹形図の作成 (SPSSの場合)：[分析] [分類] [階層クラスタ] [クラスタ対称→変数] [方法] [クラスタ化の方法→ウォード Ward 法] [続行] [作図] [デンドログラムにチェック] [つららプロット→なし] [続行] [OK] で PROXIMITY と CLUSTER が実行され、樹形図が得られる。

② MDSの布置図の作成 (SPSSの場合)：[分析] [尺度] [多次元尺度法 (ALSCAL)] [データから距離行列を作成] [測定方法→間隔→ユークリッド距離] [距離行列の作成→変数間] [続行] [オプション] [被験者ごとのプロットとデータ行列にチェック] [続行] [変数を左から右に投入する] [OK] で PROXIMITY による距離行列と ALSCAL による MDS の布置図とが両方得られる。なお、MDSの次元数については、高次の布置にしてストレスを低めるよりも、最初から二次元布置に固定したほうがよい。それは視覚的に地図を見るように解釈理解が可能だからである。

### 9-2-4 ステップ(4)：布置図に基づく研究協力者と研究者の対話

① 研究者側の準備：MDSのStress値と $R^2$ 値の検討：Stress値は元のデータと布置図のズレの大きさの指標であり小さいほどよい(Kruskal & Wish, 1980)。.10以下の値であることが望ましいが、.10以上であっても不適という

ことではない。 $R^2$  値は決定係数である。パーセンテージにして、距離行列の関係布置図が何%表現しているかを見る指標である。これら2つの指標は、研究協力者の生成した要素と構成概念の構造が2次元に縮約できるかの目安になるものである。ただし、指標値が良くなかったということが、直ちにデータを解釈することに無理があるということにはならない。むしろ、態度構造が3次元以上の構造をもっているが、そのうちの最初の2つの次元を布置図が表していると捉えられる。3次元以上の構造を持つ場合、布置図は複数必要である。しかし、研究協力者にとっては、複数の布置図を見て解釈を進めることは、認知的・時間的負担が増大する。そこで特殊な場合を除き、代表的な最初の2次元による情報に基づいた布置図を解釈することにしてよい。意味関係を基に、布置内に軸を自由に設定してもよい。布置は回転が可能であるし、軸は斜交でもよいし、原点を通らなくてもよい（好きなように引ける）。

クラスター分析はMDSの布置図の解釈の手がかりとして有効である(Kruskal & Wish, 1980)。クラスター分析によって、MDS項目を囲う「島」を作成する。樹形図の結果から機械的に作成してもよいし、樹形図を参考にしながらも、項目内容を吟味しつつ、KJ法のように手作業で「島」作りをおこなってもよいだろう。

②**実際の面接**：まずはじめに、MDSの布置図(島なし)を見せ、研究協力者に見方を説明する。次に研究協力者はその布置図の解釈をする。次に研究者が協力者に島つき図を見せ説明する。内藤(2002, p.22)のいう「現象学的データ解析技法」により対話を進めていく。

### 9-2-5 ステップ(5) 総合的解釈の段階

各々の個人の総合的解釈は、内藤(2002, pp. 55-58)のいう、以下の3つのステップにしたがう。第1ステップは、各種指標とりわけ島の意味と軸の結果の意味を中心に読み取り確認し、研究協力者の内界を味わう。第2ステップは、第1ステップで得られたデータの結果を既存の理論や知見を参照し比較したり関連づけたりする。解釈の幅を広げ、組み合わせ、多面的に論ずる。第3ステップでは、既存の理論や知見からの飛躍を試みながら価値創造的な解釈をする。事実を並べた記述レベルを乗り越えて、新たな発見的価値をもたらすよう

な解釈を求め続ける。

### 1) 例1：教頭による「職場のコンフリクト」の総合的解釈

レポートリーグリッドを用いた対話法によるHITY法で得られた表9-2の10項目に基づいてMDSにより作成された布置図を図9-1に示す。MDSのStress値は.097であり、Kruskal & Wish (1980)の基準からすれば、元のデータと布置図にズレが少なく当てはまりが良いことを示している。また決定係数(説明率) $R^2=.94$ であり、元のデータの94%が二次元空間に再現できたことを示している。

図9-1の各「島」についての研究協力者の解釈は次の通りであった。

(A) 上の「島」：二人教頭で互いを理解しあうという仲間意識。共通理解によりかならず着地点がみえる。

(B) 右下の「島」：学校全体の課題として考えられる。学校としての課題解決が難しい。全員の教員が協力しないとできない風土とか文化がみられる。

(C) 中下の「島」：具体性があるから一対一で話してもわかってもらえない。小さいことだけれど、先生方にアドバイスしたがすぐには納得してもらえな

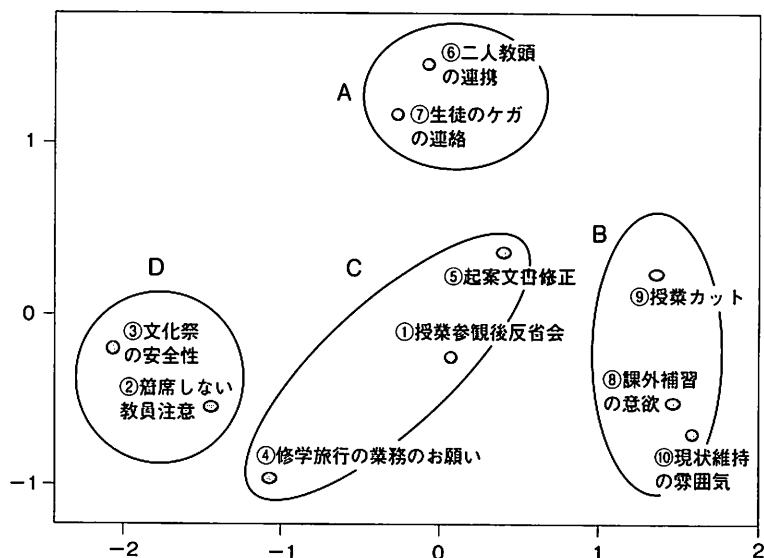


図9-1 教頭のコンフリクトの布置図 (MDSによる)



った。すぐわかりました、という返事はもらえなくてときに慚然とされ、ときにできませんといわれる。そんな時、教員のプライドがある。こちらの自己解決を迫られる。まどろっこしい。コンフリクトである。

(D) 左下の「島」:単純に言葉の行き違いによるバーンという衝突である。自分も悪かった、と済んでしまう。教員から強い反発を受けた。公然と文句をいつてきた=不快な部分。瞬間的なボタンの掛け違い。相手がこっちのいつていることをわからずに、因果を含めたつもりなのに、大声でいわれると感じが悪い。

この教頭のケースは、(もう一人の教頭との関係もあるが、)ほとんどのコンフリクトが部下にあたる教員との関わりに関する人間関係のトラブルあるいはマネジメントの難しさに関するものであった。高校の教頭の主任務は校長と一般教職員の間立って校務を円滑にすることにある。その場合の最大のコンフリクトが人間関係の調整にあるということである。今回のデータはこのような教頭の立場をよく表しているといえよう。

## 2) 例2：両親の育児イメージ構造

ある父親の育児イメージ構造の例を図9-2に示す。ここではMDSによる配置図を、クラスター分析によって得られた4つの島(クラスター)による解釈とともに、左下から右上への矢印による「容易さ」の軸と、右上から左下への矢印によって示される「好んでやろうとする」の2つの軸による育児行動のイメージの要約的な解釈も可能となった。2軸により右上、左上、左下、右下の4象限に分類することも可能である。

また、このときは4組の父母に対してHITY法をおこなっている。これらの父親の育児イメージ構造の4例を研究者が比較してみると以下の2点が明らかになった。

①育児イメージ構造の中に共通したイメージの育児行動がある(例:「お風呂」・「外遊び」など楽しい活動)。

②育児イメージの全体的な構造としては父親個人により異なっている(例:「買い物」・「着替え」などは父親により位置が違う)。

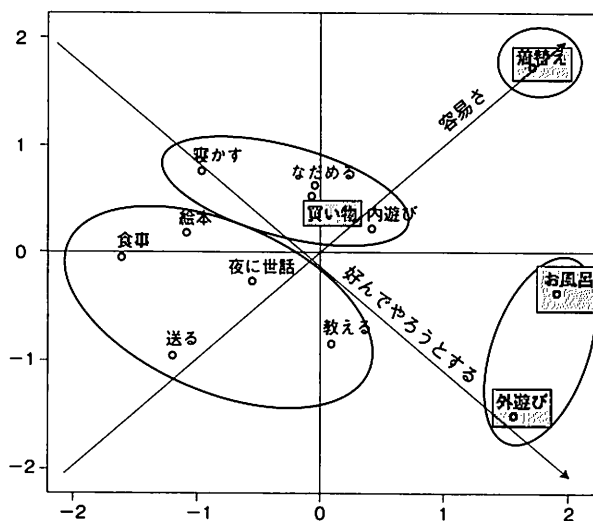


図9-2 父親Aの育児イメージ

子どもとの関わりにおいて、父親は共通して「遊び要素の強い育児」には肯定的イメージをもっているが、子どもの年齢や子どもの人数など、さまざまな条件の影響により育児イメージ構造が異なると考えられる。

### 9-3 HITY法のⅠ類とⅡ類とⅢ類

このように、HITY法によって得られた結果を個人間で比較することも可能である。このような個人間比較という観点を取り入れつつ、伊藤・芳澤・井上(2008)では個人別態度構造分析の研究協力者の観点から、HITY法は、1名の研究協力者からなるⅠ類と、2名のペアの被験者からなるⅡ類と2名以上の複数の研究協力者からなるⅢ類がある、とした。

HITY法Ⅰ類は、対話プロセスを研究協力者と研究者の対一対一で進めるやり方である。これはPAC分析と共通する方法であり、今回の調査はこの方法によった。これがHITY法による分析の基本型となる。しかし、HITY法は他の2つの応用的な分析も可能である。

HITY法Ⅱ類は、2人の研究協力者と研究者の合計3名による布置図を媒介

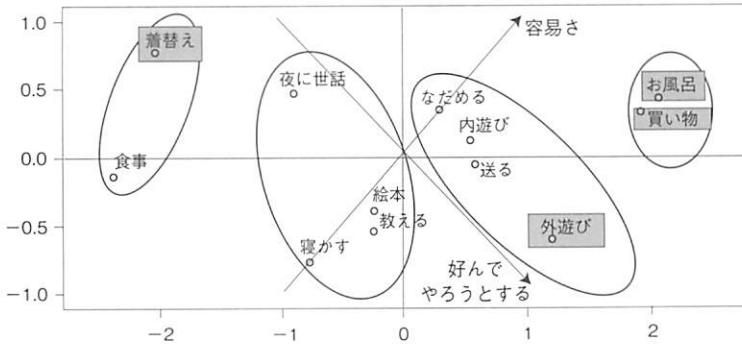


図 9-3-1 父親 D の育児イメージ

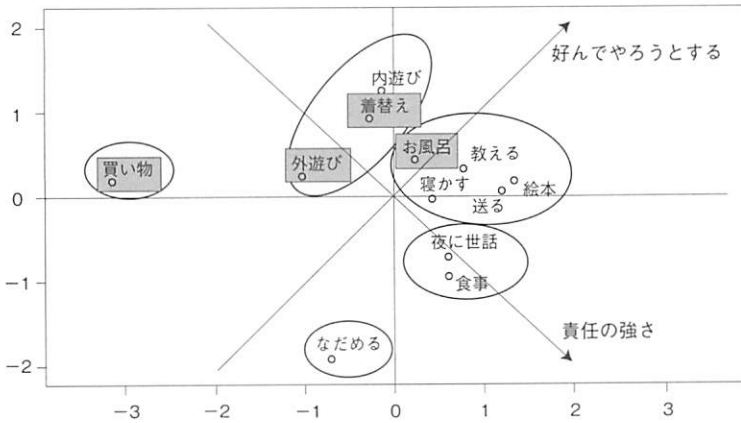


図 9-3-2 母親 D の育児イメージ

とした対話によっておこなわれる。一般的には、2名の研究協力者は夫婦、双生児、親子、きょうだい、カップルなどが考えられるが、条件が許せば、場合によっては対立する紛争当事者にも有効であろう。

生成した布置図をまず協力者個人が自分で解釈した後、協力者のペアがお互いの相手の布置図についての検討をおこなうプロセスが付け加えられる。

すなわち HITY 法Ⅱ類では、たとえば図 9-3-1 と図 9-3-2 によって表された布置図を夫と妻がまず個別に本人が解釈した後、夫婦と一緒に2つの図を見て対

話をしてもらったのである。すると、以下のような会話がなされた。

夫D:「妻は妊娠しているし、買い物とかは大変なんじゃないのかな。こういうところを自分がやればバランスいいね。」

妻D:「自分は、妊娠しているから買い物とか負担になっているけど、夫がそういうのが好きだとはわからなかったし、夫がどういう気持ちで子育てしているのかわかってよかった。今までは夫に命令口調だったけど、好きなもの（買い物やお風呂）に対してはもっと軽く言ってもやってくれそう。」

すなわち、買い物については夫婦間のイメージがまったく異なっていたことに、初めて気づいたのである。図9-3-1の父親にとって「容易さ」と「好んでやろうとする」買い物のイメージは、図9-3-2の母親の付置図においては、ちょうど真反対の場所に位置していたのである。

このような個人間の気づきが得られる点でHITY法Ⅱ類は、態度構造の可視化が可能な研究ツールであるとともに、家族療法などにおけるグループカウンセリングの実践的ツールとなることが期待される。樹形図でなくMDSによる布置図を用いることから、このような2者間の比較が容易になったといえるだろう。個人別態度構造分析の応用的方法として今後の活用が期待できる。

なお、研究協力者を2名に限らず3名以上でも有効であるかどうかは現在検討中である。

HITY法Ⅲ類は、Ⅰ類やⅡ類の方法で得られた複数の距離行列データを、ALSCALを使って個人別にMDSを計算するのではなく、個人差多次元尺度法(Kruskal & Wish, 高根訳1980; 岡太・今泉, 1994) 別名、重み付き距離に基づく多次元尺度法(足立, 2006, pp.140-143)を用いる。ただし、エレメントすなわち要素項目を同じものにそろえる必要があるので、ステップ(1)は簡便法または中間法でおこなう必要がある。それにより、図9-4のような共通空間の図を抽出する。各次元における、被験者が与えるウェイトによって、個人差が説明される。

例として、さきほどの夫婦の育児イメージを抽出した図9-4では、横軸である次元1が夫にとっての「育児のつらさ」+「育児の困難性」を表しているのに対して、縦軸=次元2は妻にとっての「育児のつらさ」+「育児の困難性」

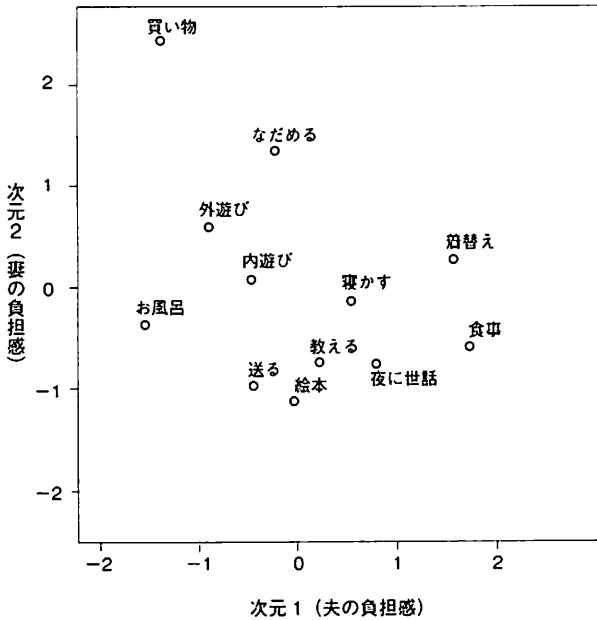


図9-4 D夫婦の個人差 MDS における共通空間

表9-5 D夫婦の共通空間の軸に対する重み付け

D夫婦	次元	
	1	2
夫	.656	.138
妻	.279	.595

を表していることが読み取れる。表9-5にあるように、次元1は夫の重みが大きく、次元2では妻の重みが大きいことを物語っている。

HITY法Ⅲ類は、3人以上の多人数の研究協力者にも適用可能である。その際にはたとえば、芳澤（2008）の両親の育児イメージ構造のデータの中で父親4人の共通性を縮約した図を作ることも考えられる。

HITY法Ⅲ類ではすべての個人の態度構造が2次元に縮約されるので「個人別態度構造分析」といえるかどうかについては議論の余地がある。

## 9-4 個人別態度構造分析の一つとしてのHITY法：PAC分析との比較

HITY法のプロセスはPAC分析(内藤, 1997, 2002)と多くの共通点がある。つまりHITY法はPAC分析を拡張した新しい態度構造分析の手法であるといえる。HITY法の手続きの構造は、PAC分析の流れ、すなわち、①自由連想、②項目間の類似度評定、③距離行列によるクラスター分析、④研究協力者によるクラスター構造の解釈やイメージの報告、⑤実験者による総合的解釈、と以下のように対比できる。

① PAC分析の自由連想段階では、自由連想は被験者自身のスキーマやカテゴリー認知といったものの構造と機能を探るための素材を得る。教頭を対象とした対話法を用いた分析ではPAC分析と同じく研究協力者自身のコンフリクトの構造を対話的に引き出すことができた。対話法を用いたことにより研究協力者からの要素と構成概念の直接抽出が可能であることを明らかにできた。したがって対話法によるHITY法はPAC分析に匹敵するような個人内の態度構造の分析が可能となっているといえる。

② 連想項目間の類似度評定段階では、PAC分析では直接的に類似度が決定されるのに対して、HITY法ではグリッド=通常の長方形の行列を元に、統計ソフトウェアにより距離行列を生成するという手続き的なちがいがある。しかし、両方とも距離行列をクラスター分析による樹状図あるいはMDSによる布置図によって視覚的に結果を表現する点では共通している。

③ PAC分析ではクラスター分析で樹形図を被験者への刺激(対話材料)とするが、HITY法ではMDSの布置図も利用し、それがメインとなる。MDSで導き出される2次元空間はその調査協力者のイメージ構造、いい換えれば「地図」のようなものであり、クラスター分析のデンドログラムよりも、各項目それぞれの距離感を視覚的に認識し易いと考えたからである。井上・伊藤(2009)での教頭のコンフリクトを布置図で表現した図9-1では、4つのクラスターが樹形図ではなく、あたかも地図にある島のように表現されていて、視覚的に解釈が可能となっている。さらに、MDSでは説明率も算出されるため、出力された布置と元のデータがどの程度ずれているか(ストレス)が客観的にわかるこ

とがHITY法の長所の一つだと考えられる。なお、PAC分析の開発者であるすでに内藤(1993)もクラスター分析による樹形図ではなくMDSを使った布置図による表現によりPAC分析をおこなうことが可能であることを、指摘している。本書第8章ではMDSにはストレス(Stress値)と決定係数( $R^2$ )が算出できるというメリットが指摘されている。また、Bell(1997)はレポートリーグリッド法の結果はクラスター分析でもMDSでもおこなえることを示している。

④研究協力者による解釈・イメージの報告段階では、喚起されるイメージ、項目群がそれぞれにまとまった理由の解釈、さらに補足的に項目単独で喚起されるイメージはPAC分析ではクラスターによるが、HITY法では布置図による。図9-1の布置図を利用した教頭との面接では、研究協力者自身で勤務校でのコンフリクトを自分なりの「島」に分けることが、自分自身への気づきを促進していた。それは調査終了後の研究協力者との雑談の中でも感ずることができた。これはPAC分析と同様に「明確化機能」(井上, 1998; 本書第8章)と同じ効果が得られているといえる。

さらに、⑤PAC分析では、総合解釈段階で、a.連想順位、b.連想内容、c.連想項目数、d.重要度順位、e.デンドログラム、f.被験者によるイメージと解釈(クラスターごと)、g.被験者によるイメージと解釈(クラスター間)、h.補足の質問(項目単独のイメージ)、i.各項目の+と-と0のイメージ、j.被験者の非言語的行動、などの情報を得て総合的な解釈を得る。これは個人の態度構造の分析のために質的方法と量的方法を両用したミックス法である。伊藤(2008)は一つの手法の中に質的方法と量的方法が組み込まれている方法をかけ算的(乗算的)ミックス法と命名している。HITY法も、レポートリーグリッド法による距離行列の生成と、それをMDSによる計算結果である布置図という量的分析をおこなった後に、面接の中で対話的に研究者と研究協力者との間でコンフリクトの構造という物語りを生成するという質的方法を併用しているという点で、かけ算的ミックス法といえる。この点でもPAC分析とHITY法両者の共通点がみられる。

## 9-5 HITY法のカウンセリングへの導入の可能性の検討

本章では、レパトリートグリッド法を用いた対話法によるHITY法（井上・伊藤，2009）と簡便法によるHITY法（伊藤・芳澤・井上，2008）を例にHITY法を紹介した。教頭の例も夫婦の例も、カウンセリングの一環としてHITY法を用いているわけではない。しかし、Fransella & Dalton（2000）は、レパトリートグリッド法によるカウンセリングを解説し、Fransella, Bell, & Bannister（2004: とくに pp.182-184）は、心理療法の研究法としてレパトリートグリッド法を用いた研究を紹介している。レパトリートグリッド法を用いた対話法によるHITY法を実施した経験から、この技法をカウンセリングに導入した場合にどのような効果が期待できるかを以下で紹介したい。

井上（1998）はPAC分析の11の機能を大きく3つの機能分野に整理している。①カウンセラーとクライアントの關係に着目した直接的な精神間機能分野、②クライアントの内面で問題への認識と自己理解を深める精神内機能分野、③クライアントの内界世界を第三者にも可能な形で提示する客観的なデータ・資料を査定・評価する道具としての間接的精神間機能分野、の3つである。さらにその分野ごとに効果を検討し、11の効果を導き出している。直接的な精神間機能分野では「導入促進機能」「自己開示促進機能」「信頼感形成機能」「対話発展機能」の4つの機能がある。精神内機能分野では、クライアントにとっての「共有知識的理解機能」「明確化機能」「自己理解促進機能」の3つの機能に加えて、カウンセラーにとっての「カウンセラー気づき機能」の合計4つの機能がある。間接的精神間機能分野では「記述記録機能」「実務説明機能」「評価査定機能」の3つの機能がある。

伊藤・芳澤・井上（2008）は簡便法によるHITY法がカウンセリングに導入した場合にどういった特徴をもつかを検討し、PAC分析と同様にこれら11の機能が働くことを示唆しつつ、PAC分析より侵襲性が少ないという特徴を指摘している。レパトリートグリッド法を用いた対話法の場合には、構成概念の対を研究協力者が生成することは困難であったという問題点がみられた。これは、コンフリクトの要素項目が複雑な内容をもつので、今回のコンフリクトの内容項目を出すことがTindall（2008）の用いたレパトリートグリッド法の例より困



難であったかもしれない。ある程度、構成概念の予測がつくときには構成概念を研究者があらかじめ用意し、研究協力者に要素項目のみを抽出してもらう折衷的な方法すなわち「中間法」(伊藤・芳澤・井上, 2008)を用いるとよいかもかもしれない。その方がカウンセリングに導入した場合にスムーズに進むかもしれない。対話法と中間法のどちらがカウンセリングによいかを検討することは今後の課題である。

## 9-6 研究デザインの視点からの方法論的考察：ミックス法としてのHTIY法

Creswell (2003) はその著書で、量的研究・質的研究といったデザインの他に「ミックス法 (mixed methods)」について説明している。ミックス法とは、量的研究と質的研究を一緒に用いる方法であるが、ミックス法は、いくつかの基準からその方略を特定し、説明する必要があるとされている。その基準とは、①順序性があるかないかという「実施」、②質的アプローチと量的アプローチのどちらに重きをおいているのかという「優先度」、③2種類のデータの統合がいつなされるのかという「統合」、④暗示的に理論を示すか、明示的に理論を示すかという「理論的パースペクティブ」の4つである。これらの基準を考え代表的な方略と照らし合わせると、HITY法は、順次的説明的方略 (sequential explanatory strategy) に近い。

順次的説明的方略の特徴として、量的データの収集と分析の次に質的データの収集と分析がある。量的データと質的データは解釈の段階で統合され、理論的パースペクティブが用いられる場合もあれば用いられない場合もある。HITY法は、①面接法であるが量的データを収集する構造化面接によるデータ収集、②MDS・クラスター分析を用いた分析、③結果(①と②で得られた)を見せながらの面接という流れでおこなわれていることから順次的説明的戦略による研究法であると考えられる。

## 謝 辞

本研究は文科省科研費基盤研究(C)(一般)(H20～H22)「高校におけるコンフリクト転換のための心理教育的プログラム開発」(研究代表者 井上孝代)の援助を受けた。

## 引用文献

- 足立浩平 2006 多変量データ解析法：心理・教育・社会系のための入門 ナカニシヤ出版
- Bell, R. 1997 *Using SPSS to analyse Repertory Grid data.* (<http://eu.wiley.com/legacy/wileychi/fransella/fransella.html> 2008年12月8日取得)
- Creswell, J. W. 2003 *Research design: Qualitative, quantitative, and mixed methods approaches* (2nd ed.) Sage. (操 華子・森岡 崇(訳) 2007 研究デザイン：質的・量的・そしてミックス法 日本看護協会出版会)
- Fransella, F., Bell, R., & Bannister, D. 2004 *A manual for repertory grid technique* (2nd ed.) Wiley.
- Fransella, F., & Dalton, P. 2000 *Personal construct counselling in action.* London: Sage.
- 井上孝代 1998 カウンセリングにおけるPAC(個人別態度構造)分析の効果 心理学研究, **69**, 295-303.
- 井上孝代 2004 社会的ひきこもり青年へのマクロ・カウンセリング的アプローチ：PAC分析による心理的理解とトランセンド法 明治学院大学心理学紀要, **14**, 17-30.
- 井上孝代 2007 高校コンサルテーションの実際と理論的課題—コーディネーション委員会へのコンサルタントとしての関わりを通して 明治学院大学心理学紀要, **17**, 9-24.
- 井上孝代・伊藤武彦 1997 異文化間カウンセリングにおけるPAC分析技法 井上孝代(編) 異文化間臨床心理学序説 多賀出版 pp.103-137.
- 井上孝代・伊藤武彦 2008 PAC分析の活用の意義と課題 心理学紀要(明治学院大学), **18**, 47-56.
- 井上孝代・伊藤武彦 2009 高校のステークホルダーがかかえるコンフリクトの構造：レパトリーグリッド法とHITY法による個人別態度構造分析 心理学紀要(明治学院大学), **19**, 21-33.
- 伊藤武彦 2008 PAC分析を語る(1)：質的分析と量的分析の結合について 日本教育心理学会第50回総会発表論文集, S132-S133.
- 伊藤武彦・芳澤宏樹・井上孝代 2008 PAC分析を応用したHITY法による個人別態度構造分析：父母間の子育て観を比較したHITY法Ⅱ類を中心に マクロ・カウンセリング研究, **7**, 8-11.
- Kruskal, J. B., & Wish, M. 1978 *Multidimensional scaling.* Beverly Hills: Sage Publications. (高根芳雄(訳) 1980 人間科学の統計学Ⅰ：多次元尺度法 朝倉書

店)

- 内藤哲雄 1993 個人別態度構造の分析について 人文科学論集 (信州大学人文学部), 27, 42-69.
- 内藤哲雄 2002 PAC 分析実施法入門 [第2版]: 個を科学する新技法への招待 ナカニシヤ出版
- 岡太彬調・今泉 忠 1994 パソコン多次元尺度構成法 共立出版
- Tindall, C. 1994 Personal construct approaches. In P. Banister, E. Burman, I. Parker, M. Taylor, & C. Tindall, *Qualitative methods in psychology*. Open University Press. (五十嵐靖博・河野哲也 (監訳) 田辺 肇・金丸隆太 (訳) 2008 パーソナル・コンストラクト・アプローチ 質的心理学研究法入門: リフレキシビティの視点 新曜社 pp. 93-118.)
- 芳澤宏樹 2008 父親が就学前の子どもを育児することの意味 明治学院大学修士論文 (心理学)

## いとう氏・井上氏論文へのコメント

著者らの提案する HITY 法と PAC 分析の違いは、基本的には、内藤が「PAC 分析研究・実践集 1」の序章において取り上げたケリーのレパトリーテスト (pp.25-26) の場合と同じである。

ケリーが「コンセプト」と「コンストラクト」とよぶものを、筆者らは「構成概念」と「要素」と表記している。これらはすべてのコンセプトが、(筆者らの「対話法」では当該個人にとっての、「簡便法」では研究者が予め決めた) コンストラクトで記述されるとの想定がされている。PAC 分析では、恋人を記述する次元 (コンストラクト) と両親を記述する次元と担任教師や職場の上司を記述する次元が異なる可能性を想定している。ケリーや伊藤らは、当該個人にとってのコンストラクトが、少なくとも当該個人の対象となるコンセプトのすべてに共通であるとの前提を受け容れている<sup>1</sup>。この点が最も大きな差異である。

また、PAC 分析がすべての連想項目の対 (連想項目×連想項目) の類似度の近さを評定させるのに対して、HITY 法では構成概念×要素の評定ですませる。

1 ただし、伊藤らの簡便法では、研究者が作成したコンストラクトが、当該個人に無条件に適合することを想定している。

構成概念数（連想項目数）に比べて要素の数が少ない場合には、評定数の節約になる。HITY 法は、PAC 分析での連想項目数が多いときの評定作業の節約になる可能性を持っているが、単一次元ではなくコンストラクトの各次元で評定することになり、評定次元の増加による負担があり得る。

対話法では、レパトリーグリッドの完成のための負担が増えるので、かならずしも PAC 分析よりも時間的な節約ができるとはいえない。ついで、MDS(図 9-1) や数量化Ⅲ類などでの図示されたコンセプトのまとめり（島）については、距離の近さだけで決定しないので、決定のための操作的基準が不安定である。研究者が決定しにくいのはもちろん、被験者にとっては難しい。クラスター分析では、併合をなぞることで、下位要素間の連関関係や因果関係を推測するのに利用できるが、MDS や数量化Ⅲ類のデータだけでは困難である。

ところで、PAC 分析でも、家族療法などで複数の家族成員で連想項目を決定したり、家族成員と治療者が共同で解釈した例がある。家族の了解を得ることができず、そこで得られた興味深い知見を公開することができなかつたとの話を、研究実施者から聞いている。PAC 分析にも発展、改良すべき点が多々ある。PAC 分析を含む「個」への科学的アプローチには多様なものがあり得る。HITY 法はそうした挑戦への試みの一つとして評価できよう。

(内藤哲雄)